

“佐渡らしさ”の発見とその伝え方

東京理科大学理工学研究科建築学専攻初見研究室 室岡 啓史
mro1118@hotmail.com

1. 研究背景および目的

日本という国は、古来より極めて稀有な日本人としてのアイデンティティ＝“らしさ”を生み出し、脈々と受け継いできた。武士道精神・侘び寂びの心・八百万神の信仰・母音中心言語などといった独特の日本文化は世界的に見ても常に少数派である。現代におけるグローバリゼーションの中で失われつつあるこの精神性＝“日本らしさ”を大切にしたい。くしくも藤原正彦著の“国家の品格”がベストセラーとなり国のあり方に関する啓発が進み、また安倍内閣は“美しい国づくり”を謳いその実現が期待されている。

本研究は、そういった本来の“日本らしさ”の一つと言えることができる“伝統的な集落内に生きる”という事象を見つめ直し、恒久的な集落コミュニティの維持・集落景観の保全を可能とする手法を創出することとする。江戸時代に生きた松尾芭蕉が“奥の細道”において“漂白の思ひやまず”と記すように、“仮初め”や“はかなさ”といった日本人の持つ独特の感性が存在する。そういった思想の現代における生き方への投影について考えることに興味がある。“日本らしさ”を大切にすべく、生き方を研究する調査エリアとして佐渡ヶ島を選定した。それは、私の両親の出身地という個人的事情であることのみでなく、佐渡ヶ島が“日本の縮図”と形容されていることによる。

2. 調査概要

調査では、佐渡ヶ島で暮らす人に対してヒアリングインタビュー（佐渡ヶ島の長短所・日常の暮らしぶり・環境に対する意識・自己と人の繋がりなどについて）や住まいの実測調査を行った。これは現地暮らしの生きた声から佐渡ヶ島の現状を把握し、今後の展望へと生かすためである。調査対象者は、“佐渡ヶ島で楽しく暮らす人”を条件に、主に人づてやメーリングリストを活用して募った（偶然の出会いによる協力も含まれる）。調査は2006年4月29日～5月6日と2006年7月16日～9月3日の期間に行った。調査範囲は全島とし、島内を自動車で移動して基本的に対象者の住まいにて調査を行った。協力者は島内出身者21名、島外出身者25名の計46名である。島内出身者のみならず、島外出身者を対象として加えたのは、生い立ちや境遇の異なる人々の相対的評価をするためである。

また、調査の一環として5月5日、9月30日～10月1日、12月30日～1月2日の3回に渡りワークショップを企画・開催し、参加者へのアンケート調査も行った。

3. “佐渡らしさ”の発見（集落を見る）（図1～図4）

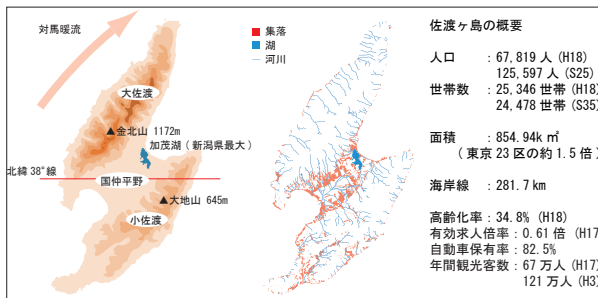
インタビューの中から得られた“佐渡らしさ”の要素を抽出する。①日本の離島の中で最大である（沖縄本島を除く）。②植生の南・北限とされる北緯38°線が島の中央を通過していることにより1700種もの植物相をもつ（cf. 屋久島の植物相は1370種）。③南北方向に伸びる一島二山型の地形により気候に多様性が生じ、また時間距離（移動に要する時間と距離の関係）が複雑化する。④思想犯の遠流地・佐渡金山の繁栄・北前船の来航といった、島外からの人の流入が日常化してきた歴史をもつ。⑤全国の1/3にも上る32の能舞台が神社に併設されながら現存する。⑥鬼太鼓・佐渡おけさ・文弥人形といった伝統芸能が受け継がれ保存されている。⑦天然記念物であるトキの野生復帰に向けて準備が進み、生息環境改善を可能とする環境保全型農業への転換が進んでいる。⑧平野部における稲作が盛んなだけでなく海・山の幸を享受できることから、およそ60万人分の食料確保が可能とされる。⑨江戸・京都・西日本の影響により島内に異なる方言をもつ（共通の方言としては図2参照）。

しかしながら調査を通して最も強く感じた“佐渡らしさ”として、⑩多様な集落および建築形態がコンパクトに凝縮されている。という最重要の要素があると考えた。なお、①～⑩の要素をもって“日本の縮図”と言われる所以であると結論付ける。

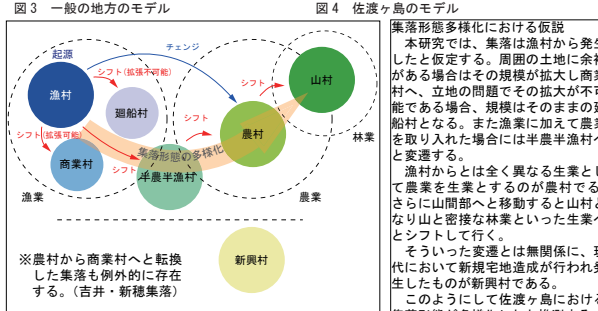
3.1 佐渡ヶ島の集落形態（図5～図8）

集落単位は、自然村としての集落と現在の行政区分とを基礎として、生業や立地・建築形態から、漁村・商業村・廻船村・半農半漁村・農村・山村・新興村の7つに分類できる。

集落とは、一つの水系のある流域に発生する共同体と考える。発生要因は水と平地であり、生活のためには水が欠かせないため、水の確保が容易な川沿いを基本としながら、比較的平坦な場所に集落が発生している。拡大に伴い集落形態が派生する。



さどのもととたびのもん
佐渡ヶ島には、島内で生まれ育った島内出身者と島外から移住してきた島外出身者がいる。佐渡の方言でそれぞれを、さどのもと・たびのもんと言う。たびのもんという言葉は一般の地方にありがちな、“よそもん”といった排他的なニュアンスの差別用語ではない。さどのもとは価値観や生活習慣が異なるけれども、そういう人がいても良いという柔らかな区別用語である。それは本文3.“佐渡らしさ”の④・⑩といったことが背景にあると考える。つまり、食に關して恵まれていたため生活にゆとりがあったことや、島外からの流入者の日常化によってその存在に対するの垣根が低下したことなどによって部外者を受け容れられるという長きに渡り培われた島民性なのである。



集落形態多様化における仮説
本研究では、集落は漁村から発生したと仮定する。周囲の土地に余裕がある場合はその規模が拡大し商業村へ、立地の問題でその拡大が不可能である場合、規模はそのままで廻船村となる。また漁業に加えて農業を取り入れた場合には半農半漁村へと変遷する。
漁村からは全く異なる生業として農業を生業とするのが農村である。さらに山間部へと移動すると山村となり山と密接な林業といった生業へとシフトして行く。
そういった変遷とは無関係に、現代において新規宅地造成が行われ発生したものが新興村である。
このようにして佐渡ヶ島における集落形態が多様化したと推測する。

集落形態派生の仮説
漁村 至近に漁港が存在する。付近に田畑をほとんど所有しない。
商業村 漁村から高密度が進み線形を保ちながら土地規模が拡張した集落。商業要素が強い。
廻船村 漁村の高密度が限界に達したことで面形となった集落。廻船を生業としていた。
半農半漁村 漁村と農村の中間に位置する集落。付近に田畑を所有する。
農村 田畑に対して親和性が強い集落。至近に広い田畑を所有する。
山村 中山間地に位置する集落。付近に田畑や人工林を所有する。
新興村 近年において新たに宅地開発が成された集落。格子状の区画が見られる。

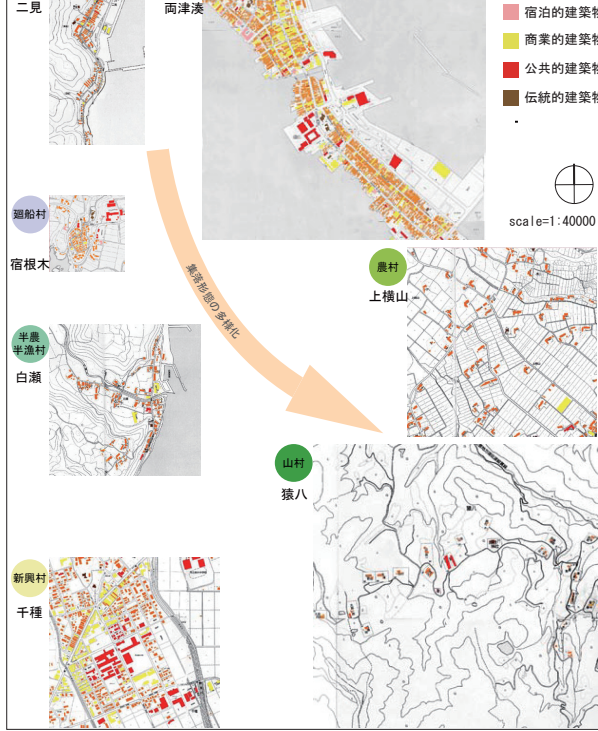


図8 佐渡ヶ島における集落形態ごとの典型集落

3.2 佐渡ヶ島における各集落形態の分布 (図9)

3.1で分類した各集落形態が、佐渡ヶ島においてどのように分布しているかを見てみる。

①集落の起源である漁村は数少ない。両津・相川・佐和田・小木といった昔から栄えている地域に商業村が多く見られる。廻船村は宿根木だけである。

②半農半漁村は全島の海岸線に沿ってほぼ満遍なく点在する。加茂湖畔の潟端は、農業だけではなくカキの養殖も行っているため、海に面していても半農半漁村と分類される。

③農村は国仲平野全域に広がっている。島内の米のほとんどはこれらの集落から生産されているといえる。小佐渡の南部分にも多く見られる。山村は小佐渡に点在する。(大佐渡の山には集落は存在しない。)

④本研究の分類においては、漁村4、商業村8、廻船村1、半農半漁村11、農村10、山村12、新興村6の合計321集落となった。

3.3 集落形態の差異による建築物の典型配置 (図10)

3.1で分類し、3.2で島内の分布を示した集落を、実測調査によって得られた具体的な敷地における建築の配置に関して分類し一般化する。

①漁・商業村・廻船村 各住戸が線形に伸びることで成立している。これは、各々が所有する船が海・湖に面しながら保管できることや間口の広さに比例して税金が高額となるという昔の制度としての名残という歴史的背景もある。

②半農半漁村 隣家が密集でもないが農村のように閑散ともしていない集落が多い。こういった集落では、母屋と納屋・蔵が平行配置となる場合が多い。

③農村 母屋と垂直に納屋・蔵が建っているのが一般的である。これは母屋からのアクセスの容易さ、移動距離の短さといった理由のみでなく、かつては飼うのが一般的であった家畜が危険にさらされないよう防犯上の理由もあり、垂直型の配置構成になったという説もある。

建蔽率(敷地面積に対する建築面積の割合)について分析を行うと、最大で70.3%、最小で21.5%とかなりの開きがあることが分かった。“佐渡ヶ島”という大きな枠組みでは同一視できないほどの密度の差異が存在している。

以上のように集落形態の多様化の流れと建築物の配置の変化には相関があり、建築可能な敷地にゆとりがあればある程、母屋・納屋・蔵が垂直化の構成へと変遷していくことが分かる。

4. ワークショップの実施 (集落を齧る) (図11~図17)

島内外の人が未知の集落を垣間見る(齧る)ことで、佐渡ヶ島の魅力を堪能し、その人にとっての大切な場所として位置づけられる可能性を見出すために体験型のワークショップを企画・開催した。(図11)

2006年の1年間で本研究のワークショップ参加や調査の補助として延べ30人以上が来島した。アンケートの結果について以下に示す。

“こいつちや佐渡ヶ島”は調査対象者の水田と敷地を活用して行った。関東から15人の知人を引き田植え・薪割り・レクチャーを行い、生きることを再考する機会とした。レクチャーは島内参加者もあり、30人を越えた。図12・図13より来島前の佐渡ヶ島のイメージはあまり良いものではなかったが、来島後は3/4以上の人が良いイメージへと転換している。閑静な農村においての滞在経験によるイメージが大きいことが分かる。また3/4以上の人が拠点の一つとして活用を希望しており、再来島も5年以内の希望が半数を超えていることから“移住とはいかないまでもまた行きたい場所”として参加者には位置づけられたことが分かる。興味が沸いたことに関しても佐渡ヶ島や地方についての関心が多く、単なる農業体験機会としてではない意識を改善する手段としてのワークショップの可能性を示している。“さむいっちや佐渡ヶ島”では、昼は真冬の集落を巡り夜は室宮家で冬の味覚を堪能した。島内外から10人ほどの参加があり交流の場とすることができた。さどのもんも島内の他集落という未知の佐渡の魅力それぞれに発見した結果となった。このようにワークショップ形式で集落を齧ることによって、“佐渡らしさ”を島内外の人へと伝えることが可能であることが示された。

5. 生き方の実態 (集落に住む) (図18~図20)

図18よりヒアリング・インタビュー対象者のデータを示す。協力者は、結果として50代男性が最も多かった。また、図19より50代以上はさどのもんが多く、たびのもののほうが相対的に若かった。図20より、商業村にはさどのもの居住者が多く山村や農村にたびのもんが移住していることが分かる。

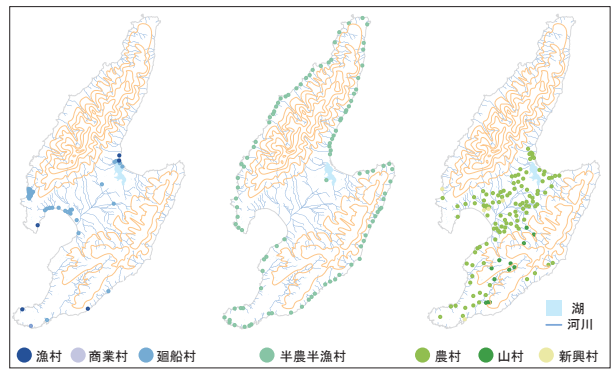


図9 佐渡ヶ島における各集落形態の分布

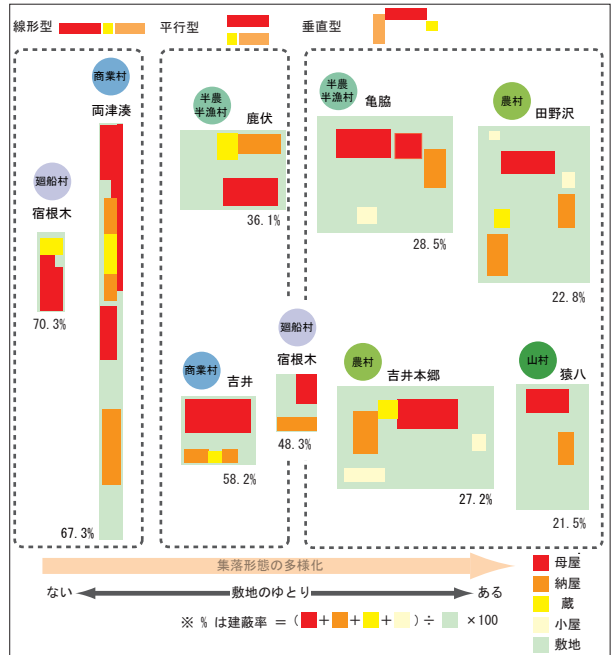


図10 集落毎の敷地における家屋配置ダイアグラム

“佐渡らしさ”を伝えるためのワークショップは地元の人との交流を計ることも目的としている。参加者に、島内生活者の日常を通して本物の佐渡を体感してもらうためである。それは佐渡ヶ島の観光スタイルをsightseeing(モノを見ること)からlifeseeing(ヒトに逢うこと)へとシフトすることの可能性にしているための試みでもある。

春: 田植え・薪割り体験・バイオマスレクチャーを通して生きるを再考する“こいつちや佐渡ヶ島”
夏: 本調査の補助としてのヒアリング・実測体験を通して本物の佐渡ヶ島を味わうこと
秋: 稲刈り体験の“またこいつちや佐渡ヶ島”(田植えの時と同じ水田)
冬: 冬の寒さを体験し堪能することで冬の観光客の動機手法を模索する“さむいっちや佐渡ヶ島”

図11 季節毎の体験型佐渡滞在としてのワークショップ

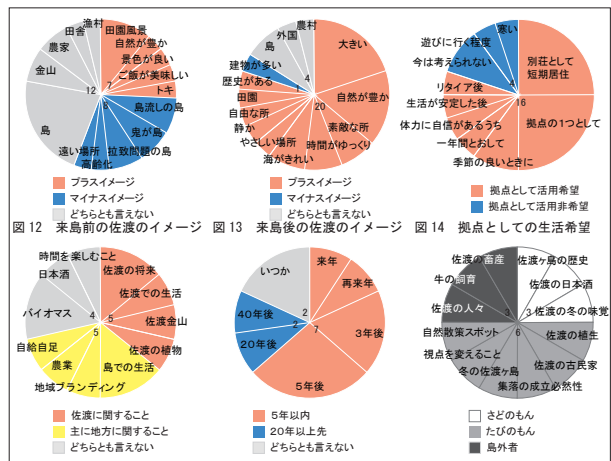


図15 興味が沸いたこと(春)

図16 再来島の希望時期

図17 興味が沸いたこと(冬)

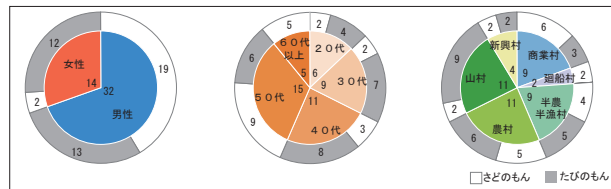


図18 対象者の男女比

図19 対象者の年齢別

図20 対象者の居住集落

5.1 職業・佐渡暦 (表1)

表1は、調査対象者の一覧である。さどのものは高校卒業後に島を離れる場合が多いが、対象者は平均29歳で帰島したという結果となった。大学・就職を含めて10年ほどを島外で過ごす傾向があると言える。また、たびのものは平均32歳で移住しており、決してリタイア後の余暇を過ごす場所としての移住ではないことが分かった。

職業に関しては、さどのものは家業を継いでいる場合が8事例と多く、たびのものはNPOスタッフや自営業を営んでいる傾向にあることが分かった。

佐渡在住歴(佐渡暦)に関しては、さどのものの平均が38年、たびのものの平均が9年という結果となり、年数としては4倍以上の開きがあることが分かった。

5.2 移住・定住の思想 (図21)

佐渡ヶ島における在住の理由として最も多かったのは、佐渡の環境に魅力を感じたということであった。島外からの移住としての最大の理由である。さどのものは長男・あるいは自分の故郷であるという生い立ちによって在住している傾向がやはり強い。出身の違いによって、置かれる境遇が全く異なっている。

5.3 敷地における合理的な植栽 (図22)

図22は、4年半前に家族5人で関東から佐渡ヶ島の農村集落へと移住した、たびのものの事例(T-11・T-12)である。徒歩300m圏内に水田・畑も貸借している。また、敷地内には多くの植物が共生している。これらは自然発生したものもあるが、人為的に育てられているものも少なくない。必要のために存在している植物の一例を以下に挙げる。①スギ：冬の冷たい北風を遮るための防風林、住宅の建材、またスギ葉は乾燥させて薪ストーブなどの着火剤として活用する。②ヒイラギ：玄関先に植えると魔除けとなり縁起が良いとされる。③ビワ：湿布としてなどの万能薬として使用されてきた。④ツバキ：実からツバキ油が採れる。⑤シノダケ・モウソウチク：竹細工の材料や壁の強化材としての竹小舞に活用される。⑥アデビ：ヒノキの一種であり、大黒柱などの建材に使用される。⑦チョマ：麻の一種であり、衣類などに使われてきた。

以上挙げたように、先祖が作り上げた意味ある植栽の恩恵をそのまま享受しながら暮らしている尊い事例である。

5.4 漁村系と農村系の伝統的な平面構成 (図23)

佐渡における古民家の特徴を挙げる。①オマエ(=オイエ・オエ・イマ)という、天井高3.5m前後もある気積の大きな空間が存在する。その空間は、居間として使用されたり、伝統行事におけるハレの日の空間として活用されてきた。②屋根には能登瓦といわれる黒色光沢のある瓦が一般的に使用されており、真夏には日光によって美しく光輝く。③島内の古民家は切妻型がほとんどを占める。④漁村系の住宅はトオリといわれる公共空間が各住戸に穿たれ、線形の平面構成となっている。

5.5 古民家半再生 (図24)

吉田兼好は徒然草において“家の作りやうは、夏をむねとすべし。”と述べている。つまり、古民家は夏の暑さを凌ぐことが最優先であるために気密性が低く、真冬は過ごしにくいという短所を持っているのである。古民家を所有する対象者(10事例)のうち、古民家再生といった大掛かりな改装をしたケースが3事例であった。しかし、それとは異なり、住みながら少しずつ改装を進めている事例も存在した。本研究ではそれを“古民家半再生”と名付け、季節の住まい分けと改修の手法と可能性について以下に述べる。(事例T-11・T-12)

①家の一部において断熱化を行い、冬は基本的にその空間で過ごす。逆に夏は開放的に暮らす。つまり、“夏は広く住み、冬は狭く住む。”ということである。②時間と資金の余裕をつくりながら、次期工事として、家の中の仕事空間など使用頻度の高い空間にさらなる断熱化工事を施し、冬の活動領域を広げていく。すなわち、“夏は広く住み、冬も少し広く住む。”ということである。③大工との繋がりによって技術の伝達が行われることや自主作業により低予算で改修が可能となる。

このように最低限の改装によって、日常の生活として伝統的な建築および景観を保全することが可能になると言える。

5.6 眠っている空間 (図25)

佐渡ヶ島における空家の数は1170戸以上と言われている。また、母屋のみならず納屋や蔵といった副建築物における居住場所としての可能性が大いにある。一般に、島内では母屋は建替えるが納屋・蔵・小屋は現状を維持する場合が多い。そのため、良質な古材が使用された魅力ある建築が眠っていると見える。そういった古建築の潜在能力を引き出している3事例を図25に示し、古民家活用のキーワードとして位置づける。

表1 調査対象者概要

事例	職業	性別	年齢	佐渡暦	在住集落	事例	職業	性別	年齢	佐渡暦	在住集落
S-01	山荘経営	♂	64	64年	瀬川上原町	T-01	牧師	♂	41	9年	八幡町
S-02	洋服店・学習塾経営	♂	58	52年	津島	T-02	牧師	♂	41	13年	八幡町
S-03	ごみ集積・学習塾経営	♂	51	48年	岡津波	T-03	市臨時職員	♀	32	0.2年	岡津波
S-04	無職	♂	70(補)	30年(補)	高井	T-04	雑音業者	♂	40(補)	20年	羽茂島
S-05	飲食店・農機動機	♂	31	27年	黒野新町	T-05	NPO法人代表	♂	40(補)	18年	羽茂島
S-06	ごみ集積	♂	25	18.5年	津島	T-06	ペンション経営	♂	45	16年	津島
S-07	温泉旅館・茶房経営	♂	53	47年	宿根木	T-07	契約社員	♀	34	8年	相川原
S-08	農家民宿経営	♂	64	42年	宿根木	T-08	住職・写真家	♂	29	5年	龍崎
S-09	農家	♂	65(補)	50年	野浦	T-09	長年経営	♂	55	17年	金井新保
S-10	半農半漁	♂	59	50年	津島	T-10	長年経営	♂	52	17年	金井新保
S-11	農家	♂	55(補)	40年(補)	湯嶋	T-11	コンサルタント	♂	46	4.5年	金井本郷
S-12	植物店経営	♂	41	37年	羽吉	T-12	専業主婦	♀	47	4.5年	金井本郷
S-13	農家(ももづくり)	♂	58	38年	羽茂島	T-13	農業委員会	♂	38	0.4年	新保田町
S-14	エネルギー会社社長	♂	57	43年	津島	T-14	農業委員会	♂	33	0.3年	新保田町
S-15	市役所職員	♂	44	38年	上横山	T-15	NPO代表	♂	58	27年	津島
S-16	マッサージセラピスト	♀	34	28年	吉岡	T-16	自給自足	♂	50(補)	24年	津島
S-17	NPO法人代表	♂	68	24年	高井内	T-17	自給自足	♂	50(補)	24年	津島
S-18	生業	♂	58	19年	津島	T-18	パン屋・塾生教師	♂	45(補)	15年	津島
S-19	環境イラストレーター	♀	30(補)	14年	津島	T-19	フリーライター	♀	37	6年	津島
S-20	大学関係者	♂	53	34年	宮川	T-20	専業主婦	♀	35	6年	津島
S-21	農業従事者	♂	43	29年	津島	T-21	自給自足	♂	33	2.5年	津島
						T-22	自給自足	♂	29	2.5年	津島
						T-23	公共施設管理者	♂	30(補)	1.3年	津島
						T-24	NPO法人代表	♂	28	3.3年	東大渡
						T-25	医師	♂	33	1年	津島

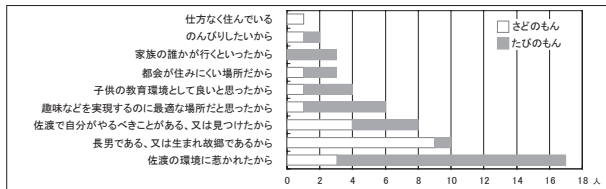


図21 佐渡ヶ島における在住の理由

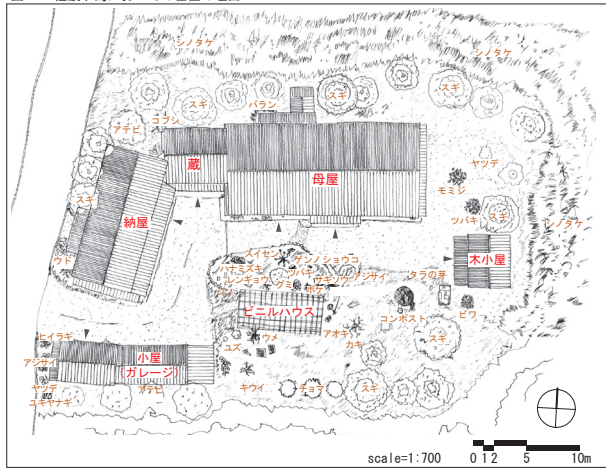


図22 典型的な農村における家屋配置と一般的な植栽

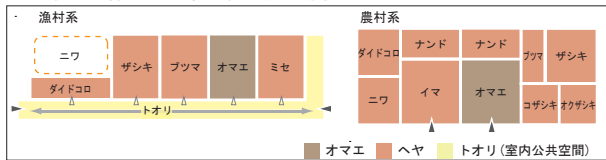


図23 漁村・農村系の一般的な平面構成

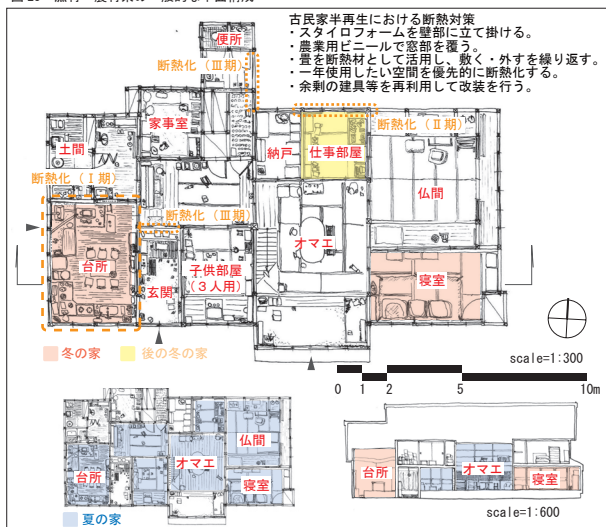


図24 平面=夏は広く住む、冬は狭く住む 断面=眠っている空間

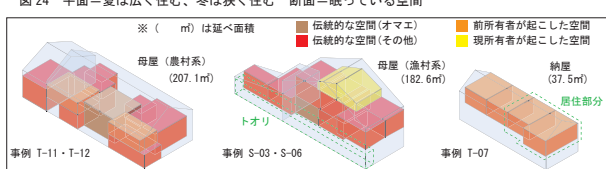


図25 古民家の立体ダイアグラム

6. 人の繋がりについて（集落と繋がる）（図26・27）

集落と繋がる手法の模索として、佐渡ヶ島における人と人の関係がどのように形成されているかについて明らかにする必要がある。そこで、対象者に対して日常においてどういった人・コミュニティとの関わりを持ちながら生活しているかについてのヒアリング調査を行った。主にさどのもん・たびのもん・島外者・島内コミュニティ・島外コミュニティの分類によって各個人がどういった繋がりを持っているのかについて考察する。

図27より、集落との繋がりが強い“集落貢献型”から島外との繋がりが大切な“島外交流型”まで様々なタイプが共存していることが明らかになった。

6.1 さどのもんとたびのものの繋がり

猿八は、旧畑野町の標高300m程の山腹に位置する集落である。さどのもん8世帯130人・たびのもん7世帯18人、合計15世帯31人の小規模な集落である（一世帯あたり平均2.1人）。住まいに関して、たびのもんは既存建築を利用しているのが3件（3世帯）・大工+居住者が建築して住んでいるのが3件（4世帯）さらに島内からもう1世帯の移住予定があり、建設中である。この猿八集落になぜ半数以上を占めるたびのもんが移住しているのかについて調査を行ったところ以下の2つの要素が浮かび上がってきた。

①人づての紹介が強いこと。猿八在住のパン職人夫妻（T-18）や国仲平野の民宿夫妻（T-09・T-10）といった人物によって猿八の魅力が伝えられたためであることが分かった。

②便利な山村であること。図30に示しているのは自動車を使用した場合における猿八から島内の移動時間地図である（中心点から各地点へと向かう方位と所要時間が相関を持つ図）。これより山村であるにも関わらず、金井の市役所・佐和田の量販店・相川の官公庁・両津の船着場・小木の船着場などへと移動が容易であることが分かる。このことから山村であるにも関わらず、利便性の高い集落であると言える。

このことから佐渡ヶ島における人里離れた山村エリアにおいて移住者が増加しているという現象が起きていることがわかった。この流れを先述の図5で説明することができる。図29より、移住可能性については集落の発生と間逆のベクトルが存在していると想定できる。（インタビューから漁村系は、周囲と物理的・心理的距離が近く、血縁関係が強いため敬遠する傾向があることが分かった。）また、調査対象者所属集落分類においても農山村への移住者が多いことが分かる。

山村や農村は移住者にとっての受け皿として有効な集落なのである。大野晃が名付けた限界集落は、他の地方と同じように佐渡ヶ島にも存在するであろう。それらは今後、荒廃を待つのではなく、稀少集落として保存される必要がある。そのためたびのもんの移住受け入れ先として活用することで相補的關係が構築可能であると考える。

6.2 役割分担（図31・32）

佐渡ヶ島は“日本らしさ”の一つである寿司で例えることができる。さどのもん・たびのもんが共存する佐渡ヶ島においては島おこしにおける役割分担の必要性が浮き彫りになった。さどのもん・たびのもん問わず存在する繋がりを多様にもつ者の存在をさど・たびから一文字ずつ取って“さびのもん”と名付ける。さびのもんには集落と集落外・島外をつなぐ役割が担われている。そして先祖から受け継いだあたりまえの生業を守り続けてきたさどのもんにはその生業をこれからも守り、島内外の需要に対して応える必要がある。どちらがかけても佐渡ヶ島における島おこしの成功はあり得ない。

7. 地域再生について（集落を活かす）

3～6までで述べて来たように、佐渡ヶ島の集落は相対性が面白い。そこで、それらを巡るような新しい余暇の過ごし方として“佐渡ヶ島集落ツーリズム”を提案する。5.5および5.6で述べた手法を用いて各集落の空いている古民家や能舞台を有効に活用するため“集落の家”として誰もが集える場所とするのである。それらがネットワークとして繋げられ巡るという行為の中で“佐渡らしさ”を大切にできる啓発が行えると考える。

8. まとめ

本研究において、集落の多様性という“佐渡らしさ”を発見した。そして“集落の家”においてその魅力を人を介して島内外へと伝えることによって集落のコミュニティや景観の維持が行われ得ると考える。そして今後、佐渡ヶ島を日本のモデルとして位置づけて行くことによって、“佐渡の拡図”ということになる日本の“日本らしさ”を尊重する国づくりへの啓発が可能となるのではないだろうか。

集落貢献型	集落および近隣地域の活動に意欲的なタイプ。
職能活用型	仕事をきっかけとして人脈が拡大するタイプ。
島内貢献型	全島に関する活動に意欲的なタイプ。
来訪者交流型	自身の集落に島内外から人を招いて交流を計るタイプ。宿泊施設保持者のみでなく、交流として招く場合もある。
コミュニティ多様型	島内外に様々な繋がりを持つタイプ。
島外交流型	島外の人に対して情報技術などを活用して生業を成立させている。
コミュニティ創設型	自身および複数人でコミュニティを立ち上げるタイプ。その時点で存在はしないが必要なコミュニティを創設し問題は正を回る。
人脈充実型	希望がコミュニティ創設型との出会いによって希望が加速度的にかなう現象が起きやすい。

図26 調査対象者の人の繋がりに関する分類



図27 繋がりによる典型例

限界集落

限界集落は、高知大学名誉教授である大野晃が1991年に提唱した概念と言われている。過疎化などで人口の50%が65歳以上の高齢者になり、生活道路の管理、冠婚葬祭など社会の共同生活の維持が困難になった集落のことを指す。中山間地や離島を中心に、過疎化・高齢化の進行で急速に増加し、それはやがて消滅に向かうとされている。共同体として生きていくための“限界”として表現されている。

旧国土庁が1999年に行った調査においては、やがて消える集落の数は日本全体で約2000集落以上であるとしている。“人が住まなくなると人が荒れ、川や海の環境が悪化し、鉄砲水も起る。国土保全の面からも重大で、決して対岸の火事ではない”（出典：朝日新聞）。そういった消えゆく集落を活性化させる手段が模索されている。

図28 限界集落の定義

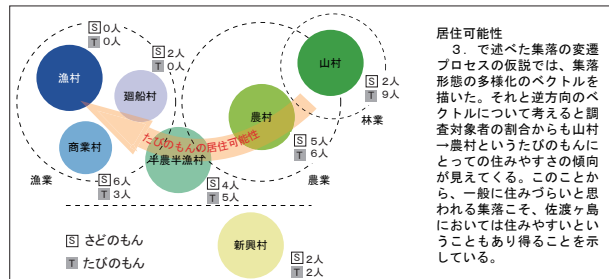


図29 調査対象者の所属集落分類とたびのもんの居住可能性

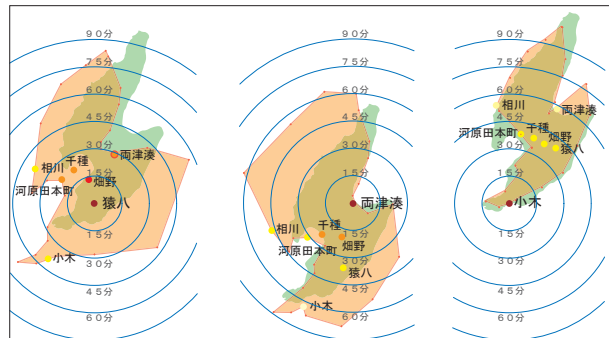


図30 佐渡の各集落（猿八・両津漢・小木）からの自動車による移動時間地図（正時間・方位図法）



図31 1カンの寿司に見立てた集落の構成モデル



図32 特上握りに見立てた佐渡ヶ島の構成モデル